那　珂　26

—那珂遺跡群第71次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第659集

2000

福岡市教育委員会

序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な交流の窓口でした。そのなかでも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印にある「奴国」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会では、それらの開発によって失われていく遺跡については、事前に発掘調査をおこない、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群は「奴国」の最も重要な拠点集落であり、これまで70次をこえる調査が実施され、数多くの貴重な遺構、遺物が発見されています。本書は個人住宅建設に先立っておこなわれた第71次調査の報告書です。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に調査に御協力いただいた土地所有者の中村泰彦氏をはじめ、御指導と御援助をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成12年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　西　憲一郎

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が平成11（1999）年８月25日から同年10月１日にかけて実施した、個人住宅建設に伴う那珂遺跡群第71次発掘調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址をSC、溝をSD、土壙をSK、柱穴をSPとした。
3．本書使用の遺構実測、現場写真撮影は山崎龍雄・上角智希が、遺物実測、浄書は上角がおこなった。
4．本書使用の方位はすべて磁北である。
5．本報告書に係る遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
6．本書の編集・執筆は上角がおこなった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査組織 …… 1
　3．遺跡の位置と環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の記録 …… 3
　1．調査の概要 …… 3
　2．遺構と遺物 …… 4
第Ⅲ章　まとめ …… 13

挿　図　目　次

第１図　第71次調査区の位置（１／4000）…… 2
第２図　調査区周辺の地形（１／400）…… 3
第３図　遺構配置図（１／100）…… 4
第４図　SC06竪穴住居址実測図（１／40）…… 5
第５図　SC08・11竪穴住居址実測図（１／60）…… 5
第６図　SC06・08出土遺物（１／３）…… 6
第７図　参考図　比恵50次調査　SD294溝出土手焙土器（１／４）…… 7
第８図　SD01・02溝実測図（平面図１／100、土層図１／40）…… 8
第９図　SD01・02出土遺物（１／３）…… 9
第10図　SK03・04・05・07土壙実測図（１／40）…… 11
第11図　その他の遺構出土遺物（１／３）…… 12
第12図　並列二条溝（道路）推定ライン（１／5000）…… 13

図　版　目　次

図版１　(1)　調査区全景（西から）
　　(2)　調査区北半（南から）；右がSD01、左がSD02
図版２　(1)　調査区北半（西から）
　　(2)　調査区南半（西から）
図版３　(1)　SD02溝　古式土師器出土状況
　　(2)　SC06竪穴住居址（北西から）

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経緯

1999年７月26日に、中村泰彦氏より博多区那珂１丁目655番における個人住宅建設に伴い、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は那珂遺跡群の範囲内に位置しているので、埋蔵文化財課では同年８月11日に試掘調査をおこなった。その結果、地表下0.65ｍの鳥栖ローム土層上面にて柱穴等の遺構が高密度に分布していることを確認した。よって、関係者と協議を行い、記録保存のための本調査を実施することとなった。

2．調査組織

調査委託：中村泰彦
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎
　　文化財部長　柳田純孝
　　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　埋蔵文化財課第二係長　力武卓治
調査庶務：谷口真由美
調査担当：山崎龍雄、上角智希
試掘調査：宮井善朗
調査作業：安高精一、山下嘉人、長野嘉一、石井雅之、安河内康矩、宗像正勝、
　　安高久子、安元尚子、阿部幸子、大橋由美子、寺園美恵子
整理作業：宮坂環

3．遺跡の位置と環境

那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央部、那珂川と御笠川にはさまれた中位段丘上に位置しており、後期旧石器時代から中世に至る各時代の遺跡が連綿としてみられ、とくに弥生時代から古代にかけての遺跡が密に分布している。弥生時代には那珂遺跡群の北に隣接する比恵遺跡群とともに、福岡平野に存在した「奴国」の最も重要な拠点集落のひとつであった。古墳時代には福岡平野で最古の前方後円墳である那珂八幡古墳や６世紀後半の横穴式石室を持つ東光寺剣塚古墳が築造された。那珂遺跡群の調査は1999年12月の時点で、74次を数える。

遺跡調査番号	9932	遺跡略号	NAK－71
調査地地番	博多区那珂１丁目655	分布地図番号	37東光寺
開発面積	193㎡	調査面積	193㎡
調査期間	1999年８月25日～10月１日		

第１図　第71次調査区の位置（１/4000）

第Ⅱ章　調査の記録

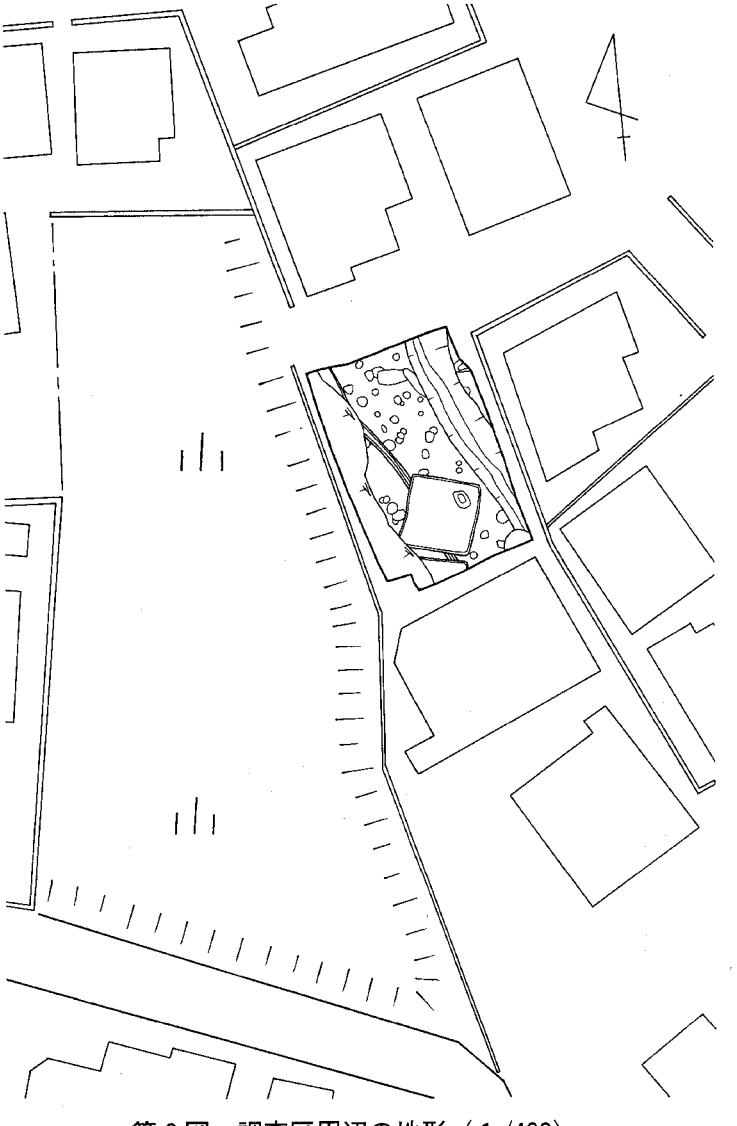
1．調査の概要

本調査区は那珂遺跡群のほぼ中央部に所在する那珂八幡古墳の北西約150mの台地上に位置している。調査区の北東30mの地点では1986年に第８次調査が行われており、弥生時代の集落を主として、後期旧石器時代から中世に至る各時期の遺構・遺物が確認されている（下村編1987『那珂遺跡』）。本調査区の現地表は標高約9.5mを測り、周辺よりも1.5m程度高いため、旧地形が良好な状態で遺存していることが期待された。

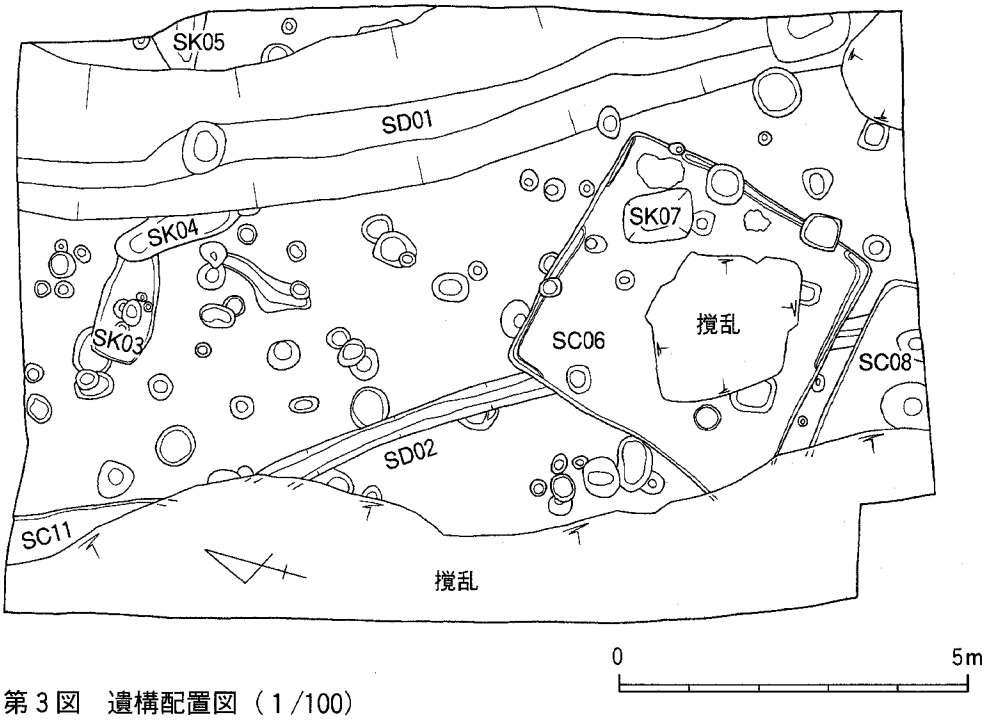
調査面積は約190㎡であり、1999年８月25日から10月１日にかけて調査を実施した。排土置き場が確保できないために、まず調査区北半について調査・記録をおこない、その後北半を埋め戻し、残る南半の調査をおこなった。重機を用いて表土を除去したが、地表下0.4～0.6mの深さで、赤褐色の鳥栖ロームにあたり、その面で遺構検出をおこなった。遺構埋土は、かたくしまった黒褐色～暗褐色土と、地山の赤褐色ロームを含みあまりしまっていない褐色土に、大別できる。両者は時期を異にするものと考えられ、遺構埋土のちがいに注意しながら精査をおこなった。調査期間中長雨が続き、予定より調査期間が延びてしまった。関係者各位にお詫びしたい。また、猛暑に長雨と悪条件のなか、調査に参加してくださった作業員のみなさまに心から御礼申し上げます。

調査の結果、古墳時代初頭の溝１条、古墳時代後期の竪穴住居址３棟、近世前期の溝１条のほか、土壙４基、柱穴多数を検出した。出土した遺物は古墳時代を中心に、弥生時代、古代、中世、近世の各時代のものがあり、コンテナ13箱分に相当する。

以下、次節では主な遺構についてそれぞれ報告する。



第２図　調査区周辺の地形（１/400）



第３図　遺構配置図（１/100）

２．遺構と遺物

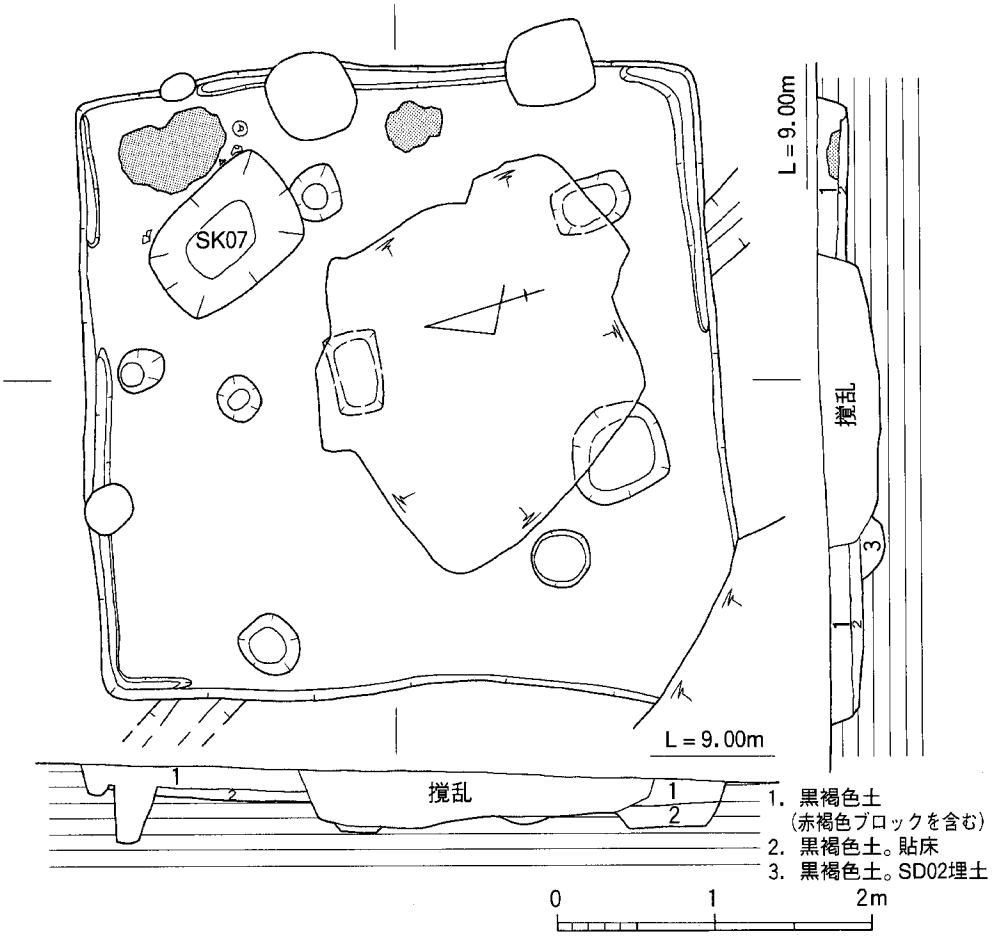
（１）竪穴住居址

SC06（第４図、図版３－２）

調査区南側中央に位置する方形住居である。南北3.9m、東西3.8mのほぼ正方形であり、壁高は15cmを測る。主軸はN－17°－E方向をとる。住居のほぼ中央には大きく茶褐色土の撹乱が入り、北東部分も土壙SK07によって切られている。そのため柱穴の配置は明らかに出来なかった。床面には一部壁溝が見られ、北東隅および東壁中央部分でかまどと推定される白色粘土を検出した。とくに北東隅の粘土の脇には床面に正位で置かれた高坏（第６図10）をはじめ土器片が集中する。床は貼床で５cm程度の厚さである。出土遺物より７世紀に位置付けられる。

出土遺物（第６図１～15）

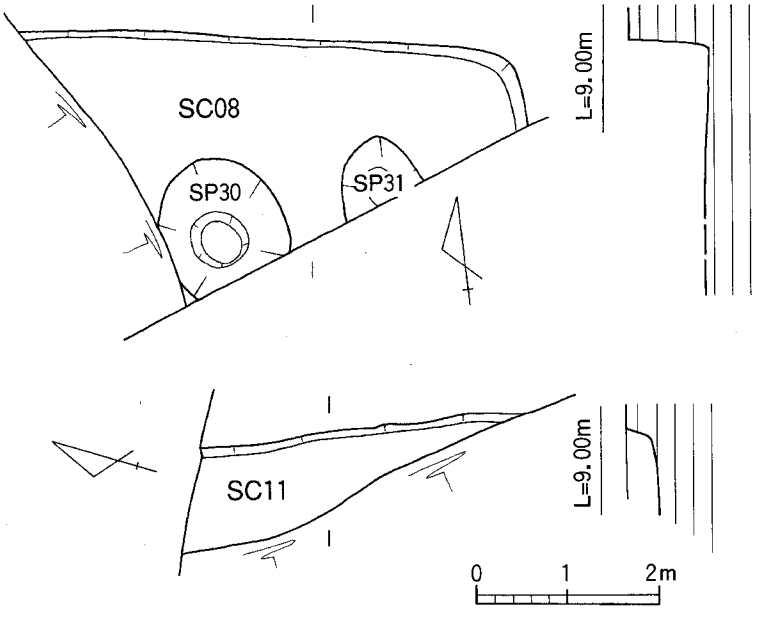
１～４は弥生土器である。１～２は弥生中期後半、丹塗りの壷。**５**は古式土師器の壷の口縁部でやや開き気味に立ちあがる。口径15.6cm。**６～７**は須恵器の坏身。６は口径13.4cm、器高3.7cm、７は口径13.0cm、器高3.3cmを測る。**８**は須恵器の坏蓋で、口径15.8cmを測る。９～12は土師器である。**９**は甕の口縁部で口径29.6cm。直立した胴部から短く外反する。外面に粗いタテハケを施す。**10**は高坏の脚部で外面に細かなヨコハケを施す。底径10.6cm。**11**は甕の胴部で頸部径13.8cm、胴部最大径17.0cmを測る。外面は粗いタテハケ、内面はケズリ調整。**12**は坏の底部で高台径14.4cmを測り、８世紀のもの。灰色を呈する。**13**は器台の脚部。胎土は非常に精緻で内面の絞りがなく、外面は面取りされていない。11世紀頃のものか。博多第97次調査（久住編1998『博多63』17頁）で類似の器台が報告されている。**14**は土製投弾で、住居の貼床粘土内にて出土した。**15**は滑石製の



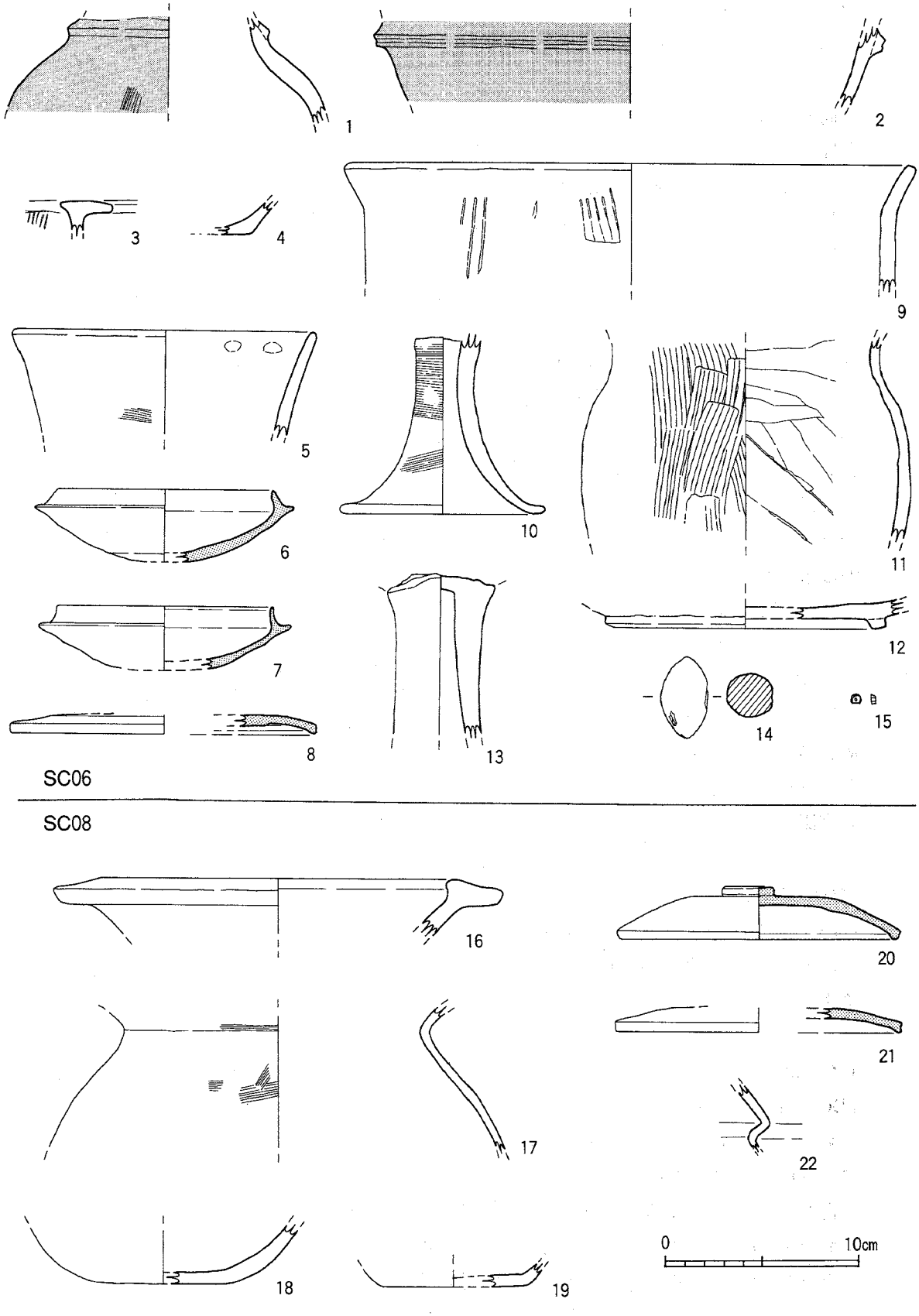
第４図　SC06竪穴住居址実測図（１/40）　※アミは白色粘土

臼玉で、直径５mm、厚さ３mmを測る。

確実な床面での出土遺物は10の高坏の脚部であり、７世紀前半に位置付けられる。６～11も同じく７世紀のもので、これらがこの住居址に本来伴うものと考えられる。



第５図　SC08・11竪穴住居址実測図（１/60）



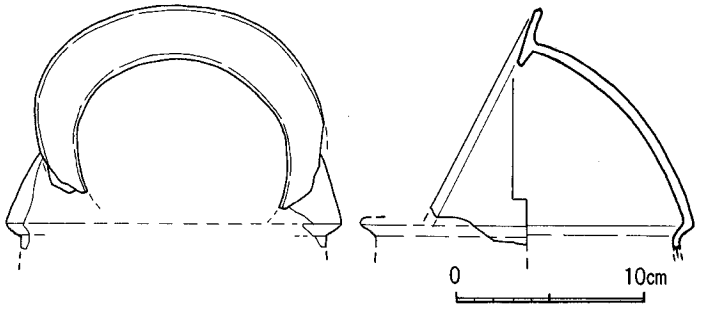
第６図　SC06・08　出土遺物（１/３）

SC08（第５図）

調査区の南端に位置する方形住居址で、東南側は調査区外へ続き、西側は攪乱を受けている。出土遺物より８世紀ごろに位置付けられる。SC06とSC08は軸方向を同じくし25cmの間隔をおいてきれいに並んでいる。復元された竪穴住居を見ると、地上に作られる屋根が周壁よりもかなり外側へ張り出しているので、両者が同時期に並んで建っていたとは考えられない。まずSC06が廃棄・解体され、柱などの再利用可能な資材が撤去される。その後しばらくして、まだSC06の痕跡が明瞭に残っている時期に、SC06を意識しつつ、SC08住居が新たに建てられた、と考えたい。

出土遺物（第６図16～22）

16は弥生土器の壷口縁部で口径23.2cmを測る。強く外傾する頸部に鋤先状口縁がつく。あるいは高坏の坏部か。弥生中期後半のもの。**17**は古式土師器の壷の頸部であり、頸部径15.8cmを測る。胎土に金ウンモを含む。**18～19**は土師器の底部。18は底部を不定方向のヘラケズリで調整し、赤色を呈する。**20～21**は須恵器の坏蓋。20は口径14．6cm、器高2．7cmを測り、８世紀のもの。21は口径14.8cmを測る。**22**は手焙土器の小片。胎土が非常に精緻で器壁も非常に薄く、橙色を呈する。比恵50次調査において溝SD294から手焙土器の上半が出土しており、22は胎土・色調ともにこれと非常に酷似している（久住猛雄氏御教示）。ただし報告書では触れられていないため、参考図として掲載しておく（第７図；上角実測）。



第７図　参考図　比恵50次調査
SD294溝出土手焙土器（１/４）

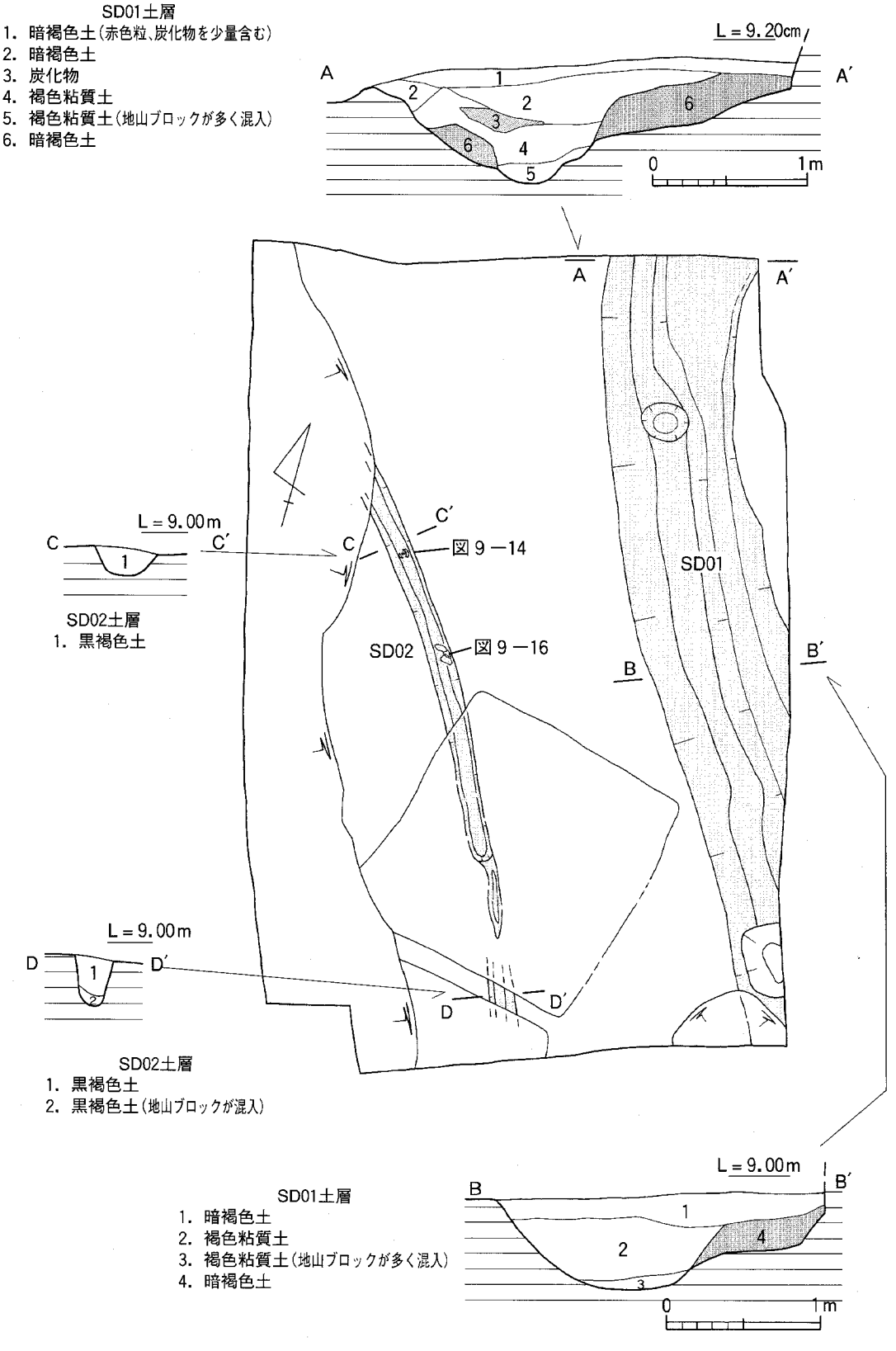
SC11（第５図）

調査区北端に位置する。その大部分が攪乱を受け、東壁がわずかに残るのみで平面プランは不明である。壁高は20cmを測る。出土遺物より古墳時代のものと推測するが、図化できる遺物はない。

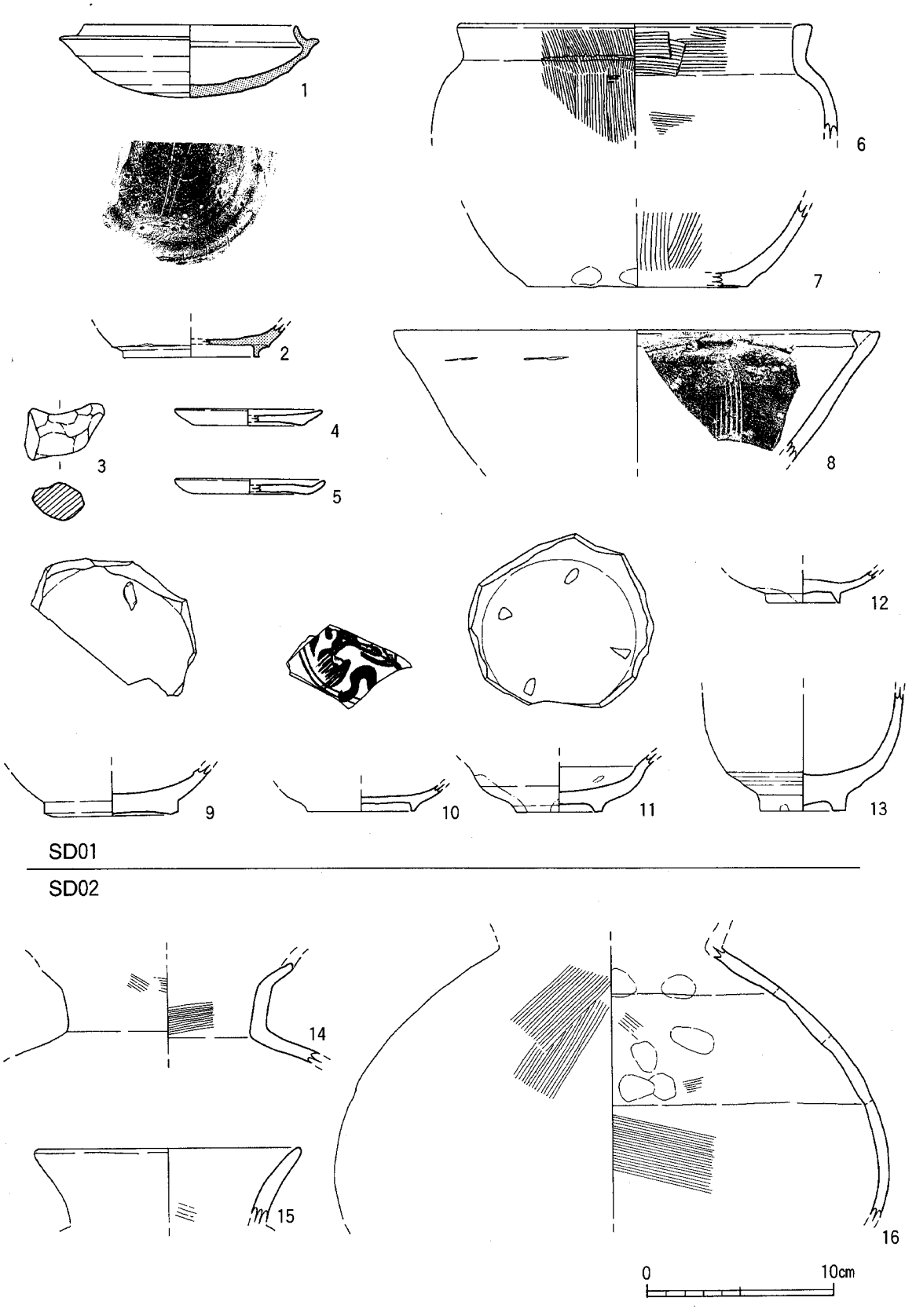
（２）溝

SD01（第８図、図版１－２）

調査区の東側をおよそN－30°－Wの方向に縦断する溝である。土層図に示されるように、SD01は一度大部分が埋没した後、再び掘り返されている。当初の溝は底の幅が広い逆台形を呈しており、遺構検出面における幅は２m30cm、深さは60cmを測る。底から17世紀の陶器皿（第９図11）が出土しており、土層の堆積は長期にわたる自然埋没の様相とは異なるので、この頃に埋められたものと推測する。再掘削の溝は遺構検出面における幅が１m40cm、深さが70cmで、断面は緩やかなU字形を呈する。下層よりやはり17世紀の陶磁器（第９図12、13）が出土している。溝上層を主として一部下層にも須恵器や中世の土器が多く混入している。



第8図　SD01・02溝実測図（平面図1/100、土層図1/40）



第９図　SD01・02出土遺物（１/３）

出土遺物（第９図１～13）

1～**2**は須恵器の坏身である。１は口径14.0cm、器高3.9cmを測り、７世紀のもの。ヘラ記号あり。２は高台径7.4cmを測る。８世紀前半か。**3**は甑の把手。**4**～**5**は底部糸切りの土師質小皿である。４は口径8.0cm、器高0.9cmを測る。５は口径8.2cm、器高0.8cmを測り、底部に板状圧痕が残る。６～８は中世の土器である。**6**は壷の口縁部。口径19.2cmを測り、外面にタテハケ、内面口縁部にヨコハケを施し、灰白色を呈する。**7**は鉢の底部か。底径11.8cmを測り、内面に粗いタテハケを施す。**8**は瓦質のすり鉢。口径26.4cmを測る。９～13は陶磁器である。**9**は白磁椀Ⅳ類の底部であり、底径7.2cmを測る。見込に白色釉を施し目跡を有する。外面は無釉。高台をわずかに削り出す。12世紀に位置付けられる。**10**は明製の青花皿で、底径6.0cmを測る。見込文様は珠取獅子か。16世紀のもの。**11**は陶器の皿でおそらく唐津。底径4.6cm。緑灰釉を施し、見込に４つの砂目跡を有する。17世紀。**12**は青花椀の底部で底径4.0cmを測る。中国産の粗製品で胎土が粗雑。白色釉を施すが、内面見込は無釉。17世紀。**13**は陶器椀である。底径4. 6cm。内外面ともに青白色の釉を施している。底部が非常に厚く、胴部は途中からほぼ垂直に立ち上がっていく。17世紀のものか。

SD02（第８図、図版３－１）

調査区をおよそN－30°－Wの方向に縦断している。撹乱を受けたり、古墳時代の竪穴住居址SC06、SC08によって切られたりで残存状況はよくない。遺構検出面における幅は約40cm、深さ20～35cmを測り、断面U字形を呈する。古式土師器が出土しており古墳時代初頭の溝である。まとめで詳述するが、那珂・比恵遺跡群を縦断する該期の並列二条溝、東側の溝である可能性が高い。

出土遺物（第９図14～16）

14～16はいずれも古式土師器である。**14**は二重口縁壷の頸部である。肩部から短い頸部が直立し、口縁が緩やかに外反する。口縁端部の観察より、二重口縁の先のほうが接合部で剥離したものと推測される。内外面ともに細かなハケを施す。**15**は壷の口縁部であり、口径14.4cmを測る。**16**は壷の胴部で胴部最大径30.0cmを測る。胴部は最大径部が下位にあるすんぐりした形で、外面に斜めハケを施す。内面調整は、下半はヨコハケを施し器面が比較的なめらかであるが、上半は主にユビナデ、ユビオサエで調整しており、器面はでこぼこしている。

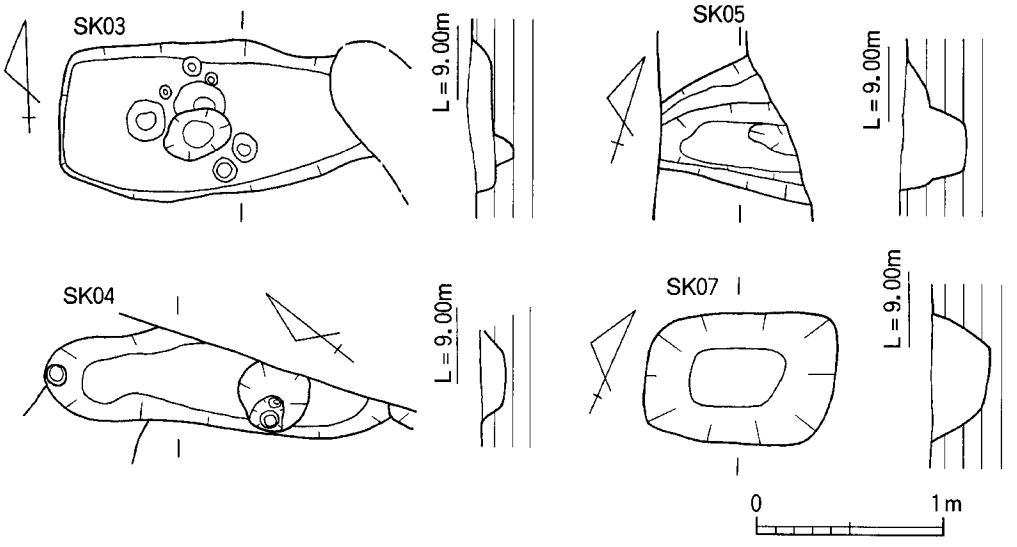
（３）その他の遺構と遺物

土壙SK03（第10図）

調査区の北側中央に位置し、土壙SK04に切られる。長軸170cm以上、短軸80cmの長方形を呈する。検出面からの深さは10cmと浅く、底面中央部で径10～40cmの穴を７つ検出した。古墳時代の土師器片が少数出土したが、図化できるものはない。

土壙SK04（第10図）

調査区北側中央に位置し、土壙SK03を切り、溝SD01に切られる。長軸190cm以上の細長い楕円形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。須恵器の高台付坏の底部（第11図１）などが少数出土した。８世紀。



第10図　SK03・04・05・07土壙実測図（1/40）

土壙SK05（第10図）

調査区北東隅に位置し、東側は調査区外へと続く。幅75cmを測り、2段に掘り窪める。土師器の丸底椀（第11図2）が出土した。

土壙SK07（第10図）

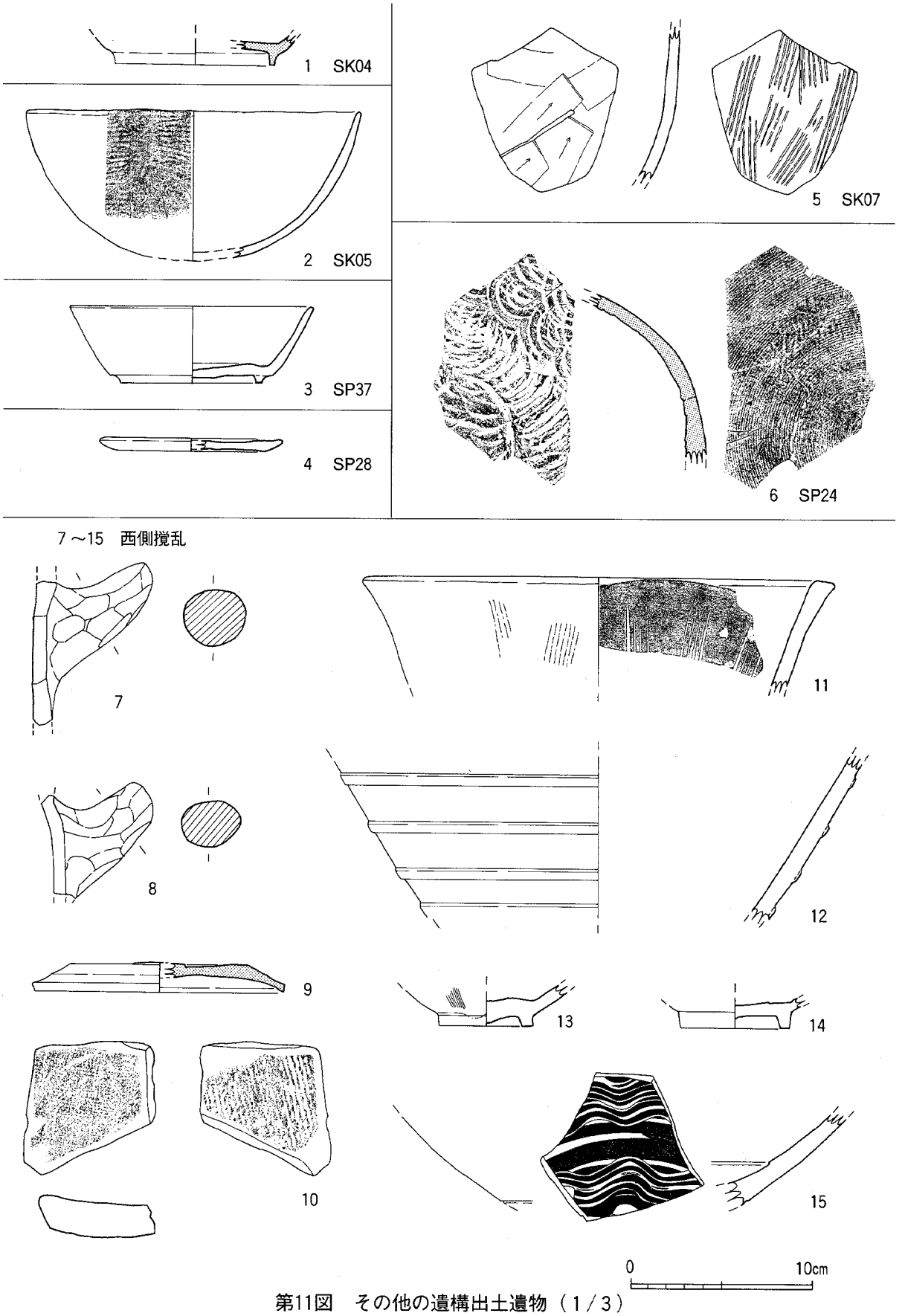
長軸105cm、短軸70cmの方形を呈し、SC06竪穴住居址を切っている。検出面からの深さは35cmで壁は緩やかに立ち上がる。土師器の甕の破片（第11図5）が出土した。

出土遺物（第11図）

その他の遺構等から出土した土器のうち図化できたものを報告する。1はSK04、2はSK05、3はSP37、4はSP28、5はSK07、6はSP24から出土した。また7～15は調査区西側の撹乱から出土した遺物である。

1は須恵器の坏底部である。底径8.8cm。**2**は土師器の丸底椀で口径18.4cm、器高8.2cmを測る。外面にタタキ痕が残る。**3**は土師器の坏で口径13.4cm、底径7.8cm、器高4.2cmを測る。**4**は底部糸切りの土師質小皿で口径10.0cm、器高0.7cmを測る。胎土に金ウンモを含みにぶい赤褐色を呈する。**5**は土師器の甕である。外面は粗いタテハケ、内面はケズリを施す。**6**は須恵器の提瓶の腹である。焼成は良好で灰白色を呈する。外面はカキメ、内面には同心円文の当て具痕が残る。

7～**8**は甑の把手である。**9**は須恵器の坏蓋である。口径13.8cm、器高1.6cmを測る。焼成不良でにぶい赤褐色を呈する。**10**は平瓦。厚さ1.9cmで内面に布目痕、外面に縄目タタキが見られる。**11**は瓦質のすり鉢である。口径26.0cmを測る。**12**は陶器の鉢である。外面に4条の断面台形の突帯がつく。**13**は青磁椀の底部。底径5.2cmを測り、外面に櫛描き文を施す。同安窯系椀Ⅰ類か。**14**は陶器の底部。底径6.0cmを測り、見込部分を蛇の目釉はぎ。**15**は唐津の皿か。



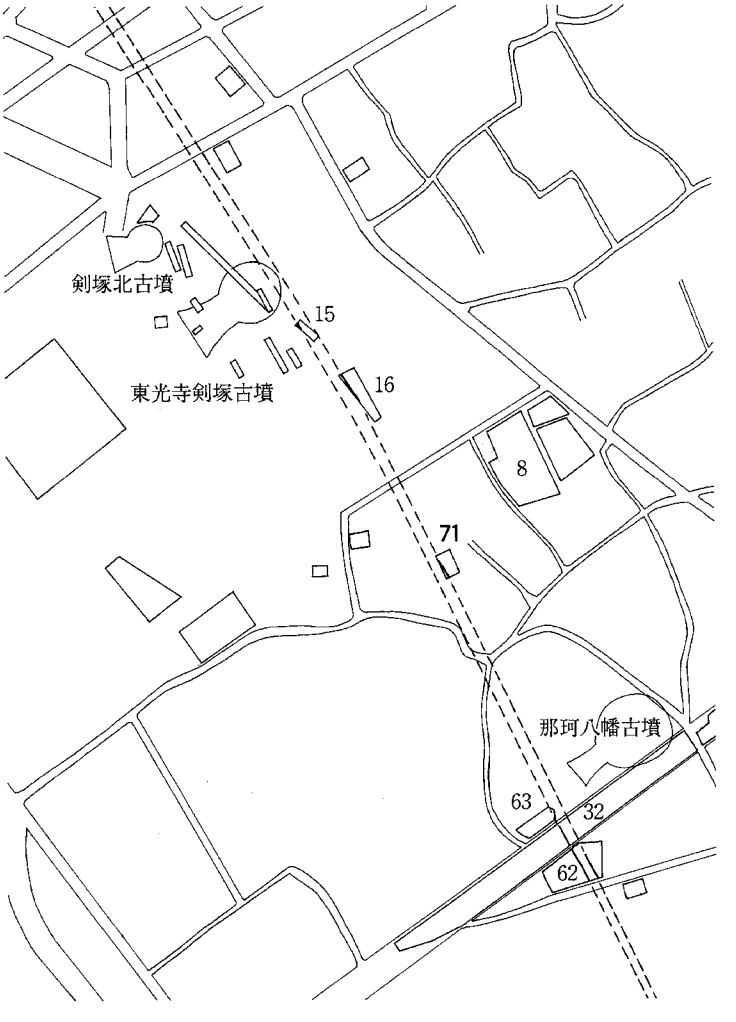
第11図　その他の遺構出土遺物（1／3）

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭の溝１条、古墳時代後期の竪穴住居址３棟、近世前期の溝１条のほか土壙や多数の柱穴群が検出された。弥生時代についても、明確な遺構こそないが、多くの弥生土器片が出土している。また、近接する第８次調査地点では弥生時代の竪穴住居址17棟、古墳時代の竪穴住居址４棟が確認されている（下村編1987『那珂遺跡』)。当調査区近辺において、弥生時代から近世に至るまで連綿として人々が生活を営んでおり、とくに弥生時代から古墳時代にかけて、大規模な集落が形成されていたと考えられる。

さて、福岡市教育委員会では1999年末までに那珂遺跡群で74次、比恵遺跡群で71次の調査を重ねてきた。近年それらの成果をもとに、両遺跡群の所在する台地の西縁を南北に縦断する、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて存続した並列二条溝の存在が推測されている（久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」、『九州考古学』74)。この２条の溝は６～８ｍの間隔をあけて並列しているが、溝の間には当該期の遺構がほとんど存在せず当時は空閑地であったと推測される。また、溝の両側に位置する遺構が溝と軸線を同一にするなど溝の規制を受けている事例が多く見られる。以上の理由から、この並列二条溝は両側に側溝を持つ道路であると推測される。もしこれが道路であるならば、日本で最古・最長規模のものであり、都市成立論とも関連し非常に興味深い。

本調査地点はこの道路推定ライン上に位置し、調査前から溝の存在が予測されていたが、調査の結果、確かに古式土師器を伴う古墳時代初頭の溝SD02が検出された。このことは那珂・比恵遺跡群を縦断する古代の道路の存在を裏付ける有力な証拠となろう。

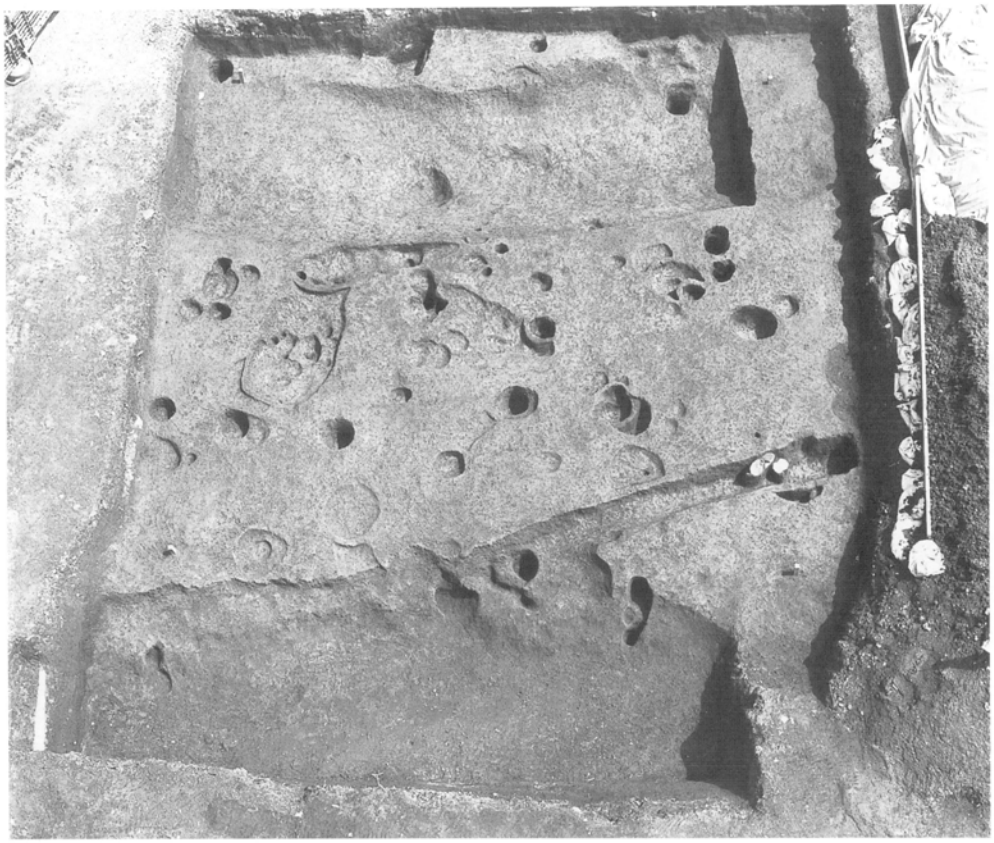


第12図　並列二条溝（道路）推定ライン（１/5000）
（久住1999をもとに作成）　※数字は調査次数

(1) 調査区全景（西から）

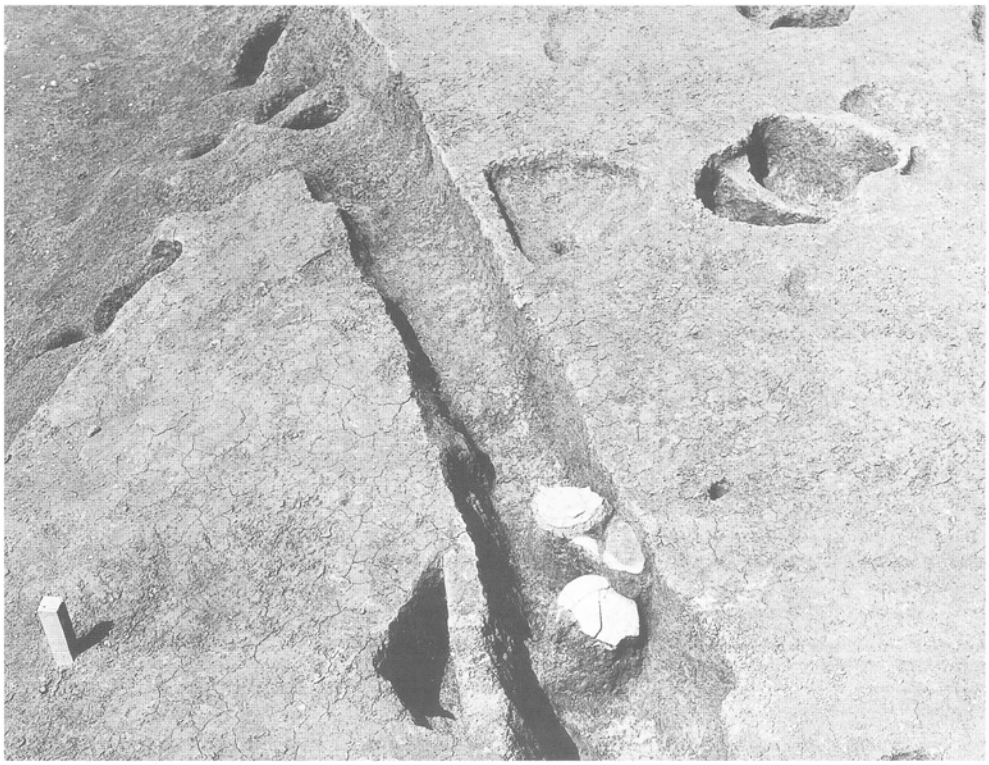
(2) 調査区北半（南から）；右がSD01　左がSD02

図版 2



(1)　調査区北半（西から）

(2)　調査区南半（西から）



(1)　SD02溝　古式土師器出土状況

(2)　SC06竪穴住居址（北西から）

那　珂　26

—那珂遺跡群第71次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第659集

2000年（平成12年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
Tel（092）711—4667

印　刷　㈱ドミックス・コーポレーション
福岡市博多区博多駅南６丁目６-１
Tel（092）431—4061

那珂26
福岡市埋蔵文化財調査報告書第659集
2000
福岡市教育委員会